

古代における導犬の観念について*

鈴木健之
(漢文学)

犬と女の婚姻の話、槃瓠伝説は、『後漢書』南蛮伝、『搜神記』などに記録され、古くから華南及び東南アジアに広く分布する大祖神話である。この槃瓠伝説について、従来多くの先学によって論究されてきた。私もかつてその分布、モチーフの比較展開について、少しく整理考察を試みた¹⁾。最近では、日本の昔話「犬掣入」との関連を論じた、注目すべき論稿も現われている²⁾。この神話の解釈として、トートテム説の多い中で、松本信広氏の見解は特異であり、さまざまな犬伝承、犬に関する習俗を考える上で、まず見逃すことができない。本稿では、松本説を一つの手がかりとして、古代における犬観念、犬信仰の諸相のうち、最も根源的と思われる「導犬」の観念とその諸現象をめぐって考察してみようと思う。

一、犬と水界

松本氏は、槃瓠伝説の中に水と犬にまつわる信仰が投影していることを指摘した。松本説は大約次のようである。

槃瓠が海を泳ぎ敵国に渡る、波間の王女を救う、大海を漂流する、別の姿が龍である等々の形式や、後漢書南蛮伝の「帝悲思之、遣使

尋求、輒偶風雨震晦、使者不得進」、搜神記卷十四の、槃瓠の死後「後母婦、以語王、王遣使迎諸男女、天不得雨」といった記事などから、犬が水と何らかの関係を持っていたことがうかがい知れる。「蛮」が虫即ち虫蛇類に従っているのは、華南の民族に虫蛇類が水神として崇拜されていたからで、これらの説話形式は最初から具わっていた。古代中国人は山川山沢を水の本源と考えており、山川の祭には犬を犠牲にしたり、犬を地下深く埋めた。苗族やナガ族には、死者の嚮導者として犬をいけにえにする習俗が伝わっている。古代中国人は冥界を黄泉といって泉と考えていたから、水と縁故のある犬を地下界の案内者としたのである。また、犬名の槃と瓠が植物であることも水とつながりがあり、苗族や瑤族所伝の、兄妹二人が葫蘆に乗って洪水から逃れるという洪水神話とも関係してくるであろう。生瓠も槃も中空ろの木器で水に浮かび、水辺の行事に用いられる。生まれた虫のようなものが槃にかぶされ、瓠に盛られ犬に変身するというモチーフは、中空ろな円形物が水上を漂い、その中から祖先が発祥したという伝承と一脈関連があり、水界の神霊が犬を伴なっているいは犬自身が神霊と観ぜられて、植物性容器に宿り漂い示現するという信仰と密接な関係を持っている。このような信仰はかつて

東亜の海辺に存在していた。かくして繫瓠説話の成立には、この水の信仰が大きな役割を演じているのである。

以上要するに、水界の精霊としての犬の信仰が、この伝説の成立に関与しているという見解である。この指摘に対して、あらためて犬と水との因縁浅からぬ多くの事例に思いあたり、私は松本説の正当性を認めざるを得ない。以下松本氏の挙げた事例以外に思いあたるままに多少補足してみよう。

繫瓠が龍に化身する話例の数は確かに少なくない。古来中国では、犬のことを烏龍と名付けてきた例もある。犬と龍との連想は、その形態の類似ばかりではなく、古く水の信仰を媒介にしたものかもしれない。

晋、張華撰『博物志』卷七異聞に、

徐偃王志云、除君宮人娠而生卵、以為不祥棄之水濱。孤独母有犬、名鵠蒼、獵於水濱、得所棄卵、銜以東歸。孤独母以為異、覆煖之、遂螻成兒。生時正偃、故以為名。徐君宮中聞之、乃更錄取。長而仁智、襲君徐國。後鵠蒼臨死、生角而九尾、實黃龍也。

鵠蒼なる犬は卵生の徐君のいわば親の如き地位にあると思われ、実は龍であった。

松本氏の紹介になる、トンキン、マン族所伝の繫瓠伝説の一資料「評皇券牒」には、日照りの際にその子孫に雨乞いをさせるといふ記事があり、松本氏は「繫瓠の子孫が水の呪術師と目せられて」いたといふ。犬を雨乞いのためにいけにえにする実例は古くから各地に存するが、例えば、

冬無龍、六日禱於名山以助之、家人祠井、無壅水。為四通之壇於邑北門之外、方六尺、植黑繪六、其神玄冥、祭以黑狗子。(漢、董仲舒撰「春秋繁露」求雨篇)

舒州灑山百九井、其実九眼泉也。早即殺一犬投其中、大雨必降、

犬亦流出(唐、李綽撰「尚書故実」)

またベトナムの広平省や日本の山岳地帯の事例の報告もある。

次の如き兀良哈の始祖伝説がある。大要を記せば、昔、豆満江の朝鮮部落のある娘が川で洗濯中、水中から「五閩の犬」(onankai)が出てきた。娘は気絶し気がつくと、犬がそばに死んでいた。娘は十か月して子を生む。生まれた子は頭の毛が犬のように黄色で体はたくましかった。のち生長して父の遺骨を池中の小島に埋葬して故郷を去った。穀物のできる地方へ移り、妻をめぐってその子孫は繁栄した。

兀良哈はツングース系満州族と考えられる。

犬にまつわる民間伝説や昔話の中に、思いあたるものが少なからず見い出される。まずかの花咲爺の犬の出現が水界からという形式は意外に多い。川上から流れてきた箱や桃の中からとか、川にしかけた魚籠や笥にかかるとか、海神の返礼といった現われ方をしており、これを柳田国男は「我邦の民間説話に於ては、川を流れて下つて来るといふことが、海を漂つて来て岸に着いたといふことと、いつも大よそ同じやうな感じで迎へられて居る。犬でも奇瑞を現すべきものは、やはり斯ういふ出現の形式を取らねばならなかつたのである」と説明している。

業欲な兄から財産分けにもらった犬が畑を耕し、霊力を發揮して、弟が金持ちになるといふ所謂「狗耕田故事」は、南中国及び西南中国に流布し、さらには朝鮮にも伝承されているが、伊藤清司氏はこの型の説話について、花咲爺の祖型の可能性を持ち、この説話の背後に犬と農耕との関係が重要な要素として横たわっている、と指摘した。

犬が最初に穀物を人類にもたらしたという民間故事がやはり中国南部、西南部に流布している。その一例の概要を示せば、

神々と人類が大海に隔てられていた時代、神々は人類に稲と家畜

を与えるために、牛、馬、猫と犬を派遣することにしたが、牛、馬、猫は大任に堪えずと固辞した。水泳の能手たる犬は体中に穀粒を附着させて届けることにした。崑崙から人類の住む陸地に泳ぎ渡った時、穀粒は犬の尾の尖端にひとつまみだけ残っていた。こうして稲は犬によって地上にもたらされた。

伊藤氏はまたこの犬の穀物将来譚の起源に農耕文化と関連した何らかの犬信仰（ひよつとすると、穀神、穀霊としての犬であろうか）の存在をここでも示唆している。狗耕田説話と犬の穀物将来説話の背後に存在する農耕文化的要素は否定しがたいと私も考えるし、またこの両説話の成立のおおもとのところで、水と犬にまつわる信仰が深く関わっていたにちがいない、その痕跡も明らかに残っていると考える。

台湾から沖繩にかけて、犬が水を発見する話が分布しているが、沖繩では、「語り井」「語り川」の伝説として多く流伝している。例えば、柳田によれば、

犬が岩穴の奥から出て来たといふ口碑は、数多く諸国に分布して居る。其中でも是まで最も發生の理由を知るに苦しんだのは、犬に教へられて清き泉を発見したといふ話の、そちこちに伝はつて居ることであつた。沖繩では南山王国の城山の北麓に、嘉手志川といふ有名な大清水がある。昔此土地の人々が飲料の得がたきによつて、何れへか退転しようと決意して居た時に、岡の茂みの奥から沾れて一疋の犬が飛出したので、そこに泉のあることを始めて知り、永く安住の計を立つるを得たと称して、今も井の上⁹に在る一つの石を、其犬の霊の宿りとして拝して居る。嘉手志川は即ち語り井の意である、解説したものが古い記録にもある。

この語り井の伝説から白米城伝説の一例が思い浮かぶ。それは長野県北安曇郡中土村平倉の古城址にまつわる話で、柳田の紹介によれば、飯森十郎といふ武士が、武田方に攻められて水の手を断たれ、白

米で馬を洗つて見せたりして敵を欺かうとしたが、城中の飼犬が水を呑みに山を下つて来たので、其苦計も見頭はされて落城した。それ故に麓の里倉といふ部落では今でも戒めて犬を飼はない（小谷口碑集）。

柳田はついでこう書いている。

犬が水の在り処を教へたといふ方の話は方々に在る。……恐らく水の神の祭と比動物と、古く特別の関係があつたことを意味するものであらう。

そのむかし、東亜において、この動物が水界の靈物と信じられ崇拜されていたことは、以上の諸例によつて明らかであらう。

ところで、犬が水源を発見したという話は、きわめて示唆的に思われる。現実にこの動物が地下の源泉をさがしあてたことは充分に想像し得る。犬は人間に見えざる、水が通じている地下の世界を察知できた。当然原始の人々の目には、神秘なる靈獸と映った。人間に不可知の地下界、あるいは靈界をこの動物は知っている。他界への暗い道中をこの動物に託せば、人はたどりつくかもしれない。それは原始の觀念であつた。思うに、犬が水界の靈物という信仰は、二次的ないしは派生的に發生したものであつて、地下界の道を知る動物という觀念のほうが恐らく本源的ではなかつたか。水界の靈獸の信仰の母胎は、地下界、他界へ人間を導く犬であつたらうと私は考えるのである。

二 冥界の導犬

中国古代、犬はさまざまな用途で多量に犠牲に用いられた。殷代卜辞にも犬牲に関する記録は多い。卜辞に見られる、殷代犬祭の対象及びその方法に関して、凌純声が要領よくまとめている。煩多を避けて、実例は省くが、それによれば、祭祀の対象には、風（鳳）、四方、日な

どが見られ、犠牲の方法としては、血を用いるもの、はりつけ、焼く、土中に埋めるなどがあった。

犬を構成要素に持つ漢字は、しばしば原来是犬をいけにえにする祭祀の名であった。𤝵、𤝶、𤝷、然、𤝸、壓、𤝹、哭、器、伏、類、𤝺、冢……犬を用いる祭祀がいかに多様な形態で盛行していたかを物語っている。

ここで獄字について考えてみる。

敦煌発見になる大英博物館所蔵十五経図巻に、地獄の両門柱上に踞する犬各一頭が描かれている。岡本三郎氏は、それは確実に仏教における地獄の犬であり、古く古代インドの『リグ・ヴェーダ』に見える、死界の王ヤマの二犬に由来したものと断定した。一方、仁井田陸氏はその図を牢獄と見、古代中国において現実に獄門上に犬形が載せられ、牢獄中に犬の図があったその状態を参考にして描いたもの、または少くとも牢獄に関する思想の反映したものと解している⁽¹²⁾。十五経図巻に描かれたその図絵だけに関していえば、私は、仏教の地獄思想に由来するとする岡本説が正しいと認める。しかしながら、牢獄と犬との関係を指摘した仁井田説もまた見逃しがたい。本稿の目的からいって、その説は充分考察するに値するからである。

『説文』𤝺部に、「獄、确也、从𤝺从言、二犬所以守也」とある。疊韻の訓「确」については、段注に「召南伝曰、獄、确也。确同确、堅剛相持之意」という。原告被告双方が固く譲らぬの意ととる。「義證」では、「実确人之情偽也」と、真偽を確定する意に解している。しかし私はこの「确」は、硬い岩土に固められた堅牢な所の意、すなわち地下牢のことを指していると考えたい。段氏は、「从𤝺」について、「取相争之意」とし、説解「二犬所以守也」については、「謂陞牢狗罪之所也」と注する。獄字と犬との関係の所以は、「争う犬」と「守る犬」という二点から解釈せられていくことがこれでわかる。白川静氏は、獄字の「言」

は「獄訟に当って自己詛盟を行なうこと」であり、「獄はおそらく犬牲を以てその自己詛盟を信にする意で、よって獄訟の意となる」と述べている。

「𤝺」「𤝺」も牢獄を意味する字である。𤝺は𤝺と同字で、『説文』九篇下に「𤝺、胡地野狗、从豸干声。𤝺、𤝺、或从犬、詩曰宜𤝺宜獄」と見える。『詩経』小雅、小宛のこの文は、毛詩は「岸」に作るが、韓詩では「𤝺」に作っており、『釈文』は「郷亭之繫曰𤝺、朝廷曰獄」という。

これによれば、𤝺はもと胡地の野犬のことで、地方の牢獄の呼称であったらしい。『荀子』宥坐篇「獄𤝺不治、不可刑也」の、唐、楊倞の注に、「𤝺亦獄也、詩曰宜𤝺宜獄、獄字從二犬、象所以守者、𤝺胡地野犬、亦善守獄、故獄謂之𤝺也」とあり、犬の善守性でもって獄、𤝺字は解釈されている。𤝺も本来犬の一種と考えられ、獄名である。『揚子方言』吾子篇「劍客論曰、劍可以愛身、曰、𤝺𤝺使人多礼乎」の、宋咸注に「𤝺𤝺、牢獄也」とある。明、陳仁錫の『潛確居類書』に「𤝺𤝺好訟、形獄門上」と見え、これは犬の好訟性からした解釈である。

仁井田氏は、獄門上に現われたこの𤝺𤝺を重要視したのである。同氏はまた参考資料として、宋、羅顔の『爾雅翼』の次の記載を挙げ、

𤝺、胡地之野犬也。

似狐而小

或云狐犬、謂狐与犬合所生也。字通於𤝺。

古者獄從兩犬、謂争訟之所以犬守之、而𤝺𤝺又獄名、𤝺獸也。𤝺即此胡犬也。……星禽家言、𤝺是猛獸能食師子虎豹、今獄中所画獸首是。其象、故曰𤝺獄云、中車疏考

獄中に𤝺の首が描かれている点に同氏は注目した。また明、徐応秋撰『玉芝堂談薈』にも、「懷麓堂集云、𤝺𤝺平生好訟、今獄門上獅子頭是其遺像」と見える。

中国では古来、「下獄」「沈𤝺獄」(『北史』魏収伝)などの語があるように、監獄は地下であった。そしてその地下牢には、かつて人口などに犬を置いたり、犬、𤝺の画像などを掛けたりした風習が存したので

はなからうか。牢屋を意味する、これら犬偏の字の起源がこの風習にありとする仁井田説も、資料の乏しいうらみがあるものの、私は認めざるを得ないのである。しかれば、獄に何故犬が選ばれたのであろうか。好訟の説が牽強付会に過ぎるのもとよりだが、善守の説は事柄の一面ではあり得ても、核心をついていないと思われる。暗黒なる地下の密室獄は、罪人が刑罰を受けて、やがては命の尽きる場所である。その獄に置かれた犬は、罪人の魂が外界に迷い出さぬように、その魂を死界に正しく導いていくためのものであったに相違ない。犬が選ばれたのはまさしく犬の善導性のためであった。この私の推断はあながち不穩当とは思えないのである。よって牢獄の犬と地獄の犬とは、実は結局同根であって、いずれも冥界の導犬という觀念に発していることも言っておかねばならない。

考古学上の発掘から見ても、中国古代において犬性が盛んに用いられていたことは証明されているが、ここでは殷陵の犬牲について取りあげてみる。

殷墟のある安陽小屯、その北の侯家莊西北岡において、一九三五年春に発見された殷墓第一〇〇一号大墓を例に取る。この大墓は、墓口の形が垂字形をなし、玄室の大きさは、南北約一九メートル、東西約一四メートル、その中央底部に高さ一メートルの槨室がある。底部までの深さは一〇・五メートル、地下水面に達している。槨室の内部に王と見られる死者の棺が納められていた。その槨室床面下部の中心と、槨室周壁の四隅、墓室の四隅にさらに掘り下げた腰坑と呼ばれる小坑がある。腰坑というのは、墓底のほぼ中央に掘られたその位置が死者の腰のあたりにあるところから名づけられたもので、小墓では普通一個である。その計九個の腰坑には、石製や青銅製の武器戈を持った人物一人と犬一匹ずつが埋められていた。この腰坑の構造は、大小を通じてきわめて一般的である。犬と同葬の人間は恐らく『周礼』¹⁵⁾にいう

「犬人」のような犬飼いの役と思われ¹⁶⁾。この腰坑の犬は、地中の悪霊から死者を守護するもの、あるいは奠基すなわち地鎮の意味であると解釈されている。しかし、この腰坑の犬牲（少なくとも死者の下方の犬牲）は、やはり死者を冥界に先導するのが本来の目的ではなかったかと私は考えるのである。

習俗として明白に記録された例もある。

貴兵死、斂屍有棺、始死則哭、葬則歌舞相送。肥養犬、以采繩嬰牽、并取亡者所乘馬、衣物、生時服飾、皆燒以送之。特属累犬、使護死者神靈。歸乎赤山。赤山在遼東西北數千里、如中国人以死之魂神歸泰山也。至葬日、夜聚親旧員坐、牽犬馬歷位、或歌哭者、擲肉与之、使二人口頌呪文、使死者魂神徑至、歷險阻、勿令橫鬼遮護、達其赤山、然後殺犬馬衣物燒之。〔三國志〕魏書、烏丸伝、裴松之注

この記事は『後漢書』烏桓伝にも見える。烏丸（烏桓）は、漢、魏晋時代、内蒙古東部に居住したモンゴル・ツングース系の騎馬遊牧民である。烏丸の葬俗で犠牲とされるこの犬は、死出の山への道中、死者の靈魂を保護するよう属託されたものである。これもまた死者を冥界へ案内する犬と見て間違いない。

犬祭が普遍的に行なわれている東南アジア諸民族中、例えば、アッサム地方のナガ族、トンキン地方の山岳地帯に住む苗族などに、犬の殉葬の風習が存している。殺した犬と死人の手に紙糸で結んで葬むる苗族の例などは、導犬の典型例たるを失わない¹⁷⁾。

以上の諸例から見ても、冥界の導犬という觀念は、古代東アジア一帯に広く分布していたと思われる。ひとり東アジアのみならず、それは普遍的に信じられていた。次に諸国の神話伝承の中にそれを探ってみよう。

インド古代ヒンドウ教の聖典『リグ・ヴェーダ』の中に「ヤマの歌」がある。ヤマとは死界の王者で、最初に死の道を発見したとされる。

一〇 サラマー(神話的牝犬)の子なる二匹の犬、四つ眼にして斑あるを、直路に過ぎり走れ。しかしてよく賜物を頒つ祖先に近づけ、ヤマと共に饗宴を楽しむところの。

一一 ヤマよ、汝の二匹の番犬、四つ眼にして、道を守り、人間を監視するこれらの(犬)に、彼(死者)を託せ、王(ヤマ)よ。彼に安寧と無病とを授けよ。

一二 鼻広く・茶褐色(?)にして、生命を奪う・ヤマの二匹の使者は、人間のあいだを徘徊す。この二匹の(犬)は、今日ここに幸多き生命をわれらに返し与えよ、「われらが」太陽を見んがために。前述したように、ヤマの使者二犬は、死者を守護するとともに、死の道を跡づける役目であり、いいかえれば死者をヤマの王国へ正しく道案内するものである。

ヤマの世界は、リグ・ヴェーダにおいては、最高天にある死者の楽土であった。ところが、この他界観は、後世メソポタミア地方から、暗黒に閉ざされた地下の牢獄すなわち地獄へ墮ちるという思想がもたらされるとともに変化を来たした。ヤマは地獄の主宰者、死者の生前における悪業の懲罰者となり、仏教に入って閻魔天となった。そしてヤマの犬も、種々の仏典中の地獄にしばしば現われる、亡者をふるえあがらせる恐ろしい猛犬に変容した。『観仏三昧海経』に表わされた阿鼻地獄中に見られる「四大銅狗」などは、全身の毛から猛火を吹き出し、ものすごい形相の犬であるが、罪人が命終わらんとする時に、この銅狗は黄金の車と化して迎へ来る趣が書かれている。この犬は使者としての性格を何ほどか留めていると見ることもできよう。

古代イラン、ゾロアスター教の経典『アヴェスタ』の中にも、死界に犬が登場する。『アヴェスタ』の「ウイデーウダート」の部に、死人の運ばれた道を、白と黒の斑の耳のある四つ目の黄犬を何度も往来させて死体の悪霊を駆逐する、とある。また、現世から他界へ通じるチ

ンヴァト橋に、牛を連れた乙女が二匹の犬を連れて現われ、正信の徒を神々のいる彼岸に渡す、という。また、犬が価値を失い、精が涸渇すると、その気は生命の泉に帰し、その気から二匹のカワウソが生れ、カワウソを殺せば早魃となる、ともいう。

彼岸へ渡るチンヴァト橋を守る二匹の犬は、ヤマの二匹の犬に相当し、同根の観念に由来すると見て間違いない。その起源ははるか遠く古代インド・イラン時代に遡るものと思われる。

ヤマの犬は、ギリシャ神話にあつては、地獄の犬ケルベロスに比当される。ゲルマン神話でも、ヘル(地獄)に怪犬ガルフが現われる。

エジプト神話においても、幽界の王オシリスの審判の広間に死者の魂を導いて行く犬頭神アヌビスがいる。アヌビスは狼またはジャッカルジャッカルの神格化とも考えられている。

以上の神話上に現われた、地獄の犬、死界の犬のいずれも、その原初、死者を死界へよく導く犬、導犬の観念に由来するものと考えたい。ところで、その犬があつた世へ至る道を知っているということは、逆にいえば、この世へ帰る道を知っていることである。冥界へ導く犬は、同時にまた現世へ導く犬、再生、復活を導く犬でもあり得たのではなからうか。次なる生を決定づけるものとも見なされていたのではあるまいか。

井本英一氏の提出した見解は非常に重要である。同氏によれば、古代イラン伝承のイマ王(インドのヤマ王)は、犬を連れていないが、『アヴェスタ』に見える王統では、イマの兄が犬になつていてそのことから、イマ王の即位礼の際に犬が何らかの役割を果たしたのであると見る。またヘラクレスが十二番目の難題、地獄からケルベロスを地上に連れてくる仕事をやりとげ不死を約束されたことは、犬が再生に関わつてたことを物語る、という。井本氏はその他の事例を挙げ、次の如き結論に達している。二匹の犬、四つ目、白黒の斑などの表徴

は、生と死との象徴であり、犬は、葬礼、新年祭、即位式、祖霊祭、新嘗祭などの死と再生の儀礼に密接に関与していた、というものである。確かに犬と通過儀礼との関係については、さらに一歩つっこんだ研究が今後なされなければならないであろう。さらに井本氏は、喪家の狗、安産のお守り犬張子、狛犬、犬の穂かけ、隼人族といった事象に関連づけている。些か問題が広がりすぎた感を持つが、しかしこれらの問題については、なお綿密に考証される必要がある。ともあれ、犬と儀礼との関係は、十分に研究に値する。井本氏の推断は、少くとも私にとっては、かなり衝撃的なものとなった。

三 結 語

まさしく花咲爺の飼犬が主人に見えざる土中の宝を教えたように、犬は人間に見えない世界、人間に不可測の所在を探知する能力を有していた。人間の最も不可知の世界は何か。それは死後の世界、人智を越えた霊の世界である。この動物はその世界からの使者であり、また案内者であると信じられてきた。原始の人類の目には、それは靈妙なる神獣そのものであった。見えざる世界を探知するというこの一点が、すべての犬観念、犬信仰の帰着点といつてもいい過ぎではない。しかば、見えざる世界を探知するとは如何なる意味か。

人類生活史の大部分は狩猟生活である。この獣は獵犬として人類最初の家畜となった。この狩の名手は、人間の感知し得ぬ獲物のありかへ、時に地面に鼻をすりつけながら、ねらいだがわず導いていく。この動物は、抜群にすぐれた性能、とりわけ人間をはるかにしのぐ、地下深くにまで達する嗅覚を持っていたのである。導犬の観念は、発達した嗅覚によって獲物を追いつめる犬、そこにこそ発したのである。

以上、比較民俗学として、不充分、粗雑ながら、おおよその結論は

把握できたと信ずる。

(昭和五十三年九月十一日受理)

注

(1) 拙稿「繫瓠説話の考察(上)(中)」(『東洋文学研究』一八、一九号、一九七〇、一九七一)を参照されたい。そこでは、繫瓠伝説は原来ヤオ族の伝承であり、犬の戦功による婚姻、山居、その子の兄妹婚姻による始祖という要素を持つ古い型から、病氣治癒や不用意な約束による婚姻、海島漂着、母子相婚による始祖という型へ変化したことを明らかにした。

(2) 福田晃「『犬髯入』の位相と伝播」(『昔話の伝播』一九七六所収)。当論文は、近年採集例の増えた犬髯入譚について、モチーフの変形を明らかにするとともに、海南島黎族、インドネシアカラング族の海島型犬祖伝承のわが国への伝播を示唆している。私も福田説はかなり蓋然性が大いと考ええる。同文注(45)に紹介されている、沖繩伊良部島の採集例は、犬の戦功、犬の人間への変身脱皮のモチーフが見られ、これは、浙江、福建の畬族の繫瓠伝承と酷似しており、きわめて興味深い。

(3) 凌純声、二〇、二二頁参照。

(4) 今西龍「朱蒙伝説及老獺稚伝説」(『内藤博士頌寿記念史学論叢』一九三〇所収)七一五―七四一頁。

(5) 『昔話と文学』花咲爺(『定本柳田国男集』第六卷、一九六八所収)二〇六頁。

(6) 伊藤清司「昔話『花咲爺』の祖型」(『花咲爺』の源流——日本と中国の説話比較)一九七八所収)。「狗耕田」については、ほかに直江広治「中国の民俗学」(一九六七)の「四 狗耕田譚(犬が畑を耕す話)」があり、直江氏は「中国の狗耕田も、やはり古くは狗の出現に奇瑞の

中心を置いたらしいこと、さらにはその出現を水界に托する信仰が、かすかではあるが認められることは、各地の資料の比較によって、その大体を察することができる。(五八頁)と述べている。

- (7) 徐勻「犬与稲」(『民俗』八四期、一九二九)三一—三五頁。
- (8) 伊藤清司「犬と穀物」(伊藤前掲書所収)
- (9) 『桃太郎の誕生』(『定本柳田国男集』第八卷、一九六九所収)六九頁。
- (10) 『木思石語』(『定本柳田国男集』第五卷、一九六八所収)四〇六頁。
- (11) これら諸字については、白川静「漢字の世界1、2」一九七六、同『説文新義』一九六九—一九七四、等を参照されたい。
- (12) 仁井田陞「敦煌発見十王経図巻に見えたる刑法史料」四、牢獄(『東洋学報』第二五卷第三号、一九三八)。
- (13) 白川静『説文新義』卷十、一九七六、六四頁。
- (14) ちなみに白鳥清「牢獄及陸狂の起源に就いての臆説」(『東洋学報』第二五卷第四号、一九三八)の一異説を紹介しておこう。それは、獄、狂などの字が、犬の要素を持つのは、中国古代社会において、被判人の罪科の有無を判定させるために犬を使用した犬神判なるものの風習の名残りではないか、という説である。なかなかユニークで棄てがたい意見である。もともと、この説も犬が人間に知られぬものを察知するという特性に、その根拠を置いており、一考に値するが、いま一応紹介だけに止めておく。
- (15) 殷墓の腰坑に関しては、樋口隆康「北京原人から銅器まで」一九六九、二三八—二四九頁、貝塚茂樹編『古代殷帝国』一九六七、八三—八六頁、二六八—二七三頁など参照。
- (16) 『周礼』犬人に「掌犬牲、凡祭祀共犬牲、用牲物伏瘞亦如之。凡幾珥、沈、辜用駟可也。凡相犬牽犬者屬焉、掌其政治」。
- (17) 松本信広『印度支那の民族と文化』一九四二、四二頁。
- (18) 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』一九七〇、二二二頁。

(19) 井本英一、五、六頁。

主要参考文献

- 松本信広「槃瓠伝説の一資料」(『加藤博士還暦記念東洋史集説』一九四一 所収)
- 同「槃瓠伝説について」(『東京人類学会・日本民族学会聯合大会第四回記事』一九三九所収)
- 凌純声「古代中国与太平洋区的犬祭」(『民族学研究所集刊』一九五七年第三册所収)
- 岡本三郎「敦煌発見十王経図巻に見えたる獄門の犬について」(『東洋学研究』第一、一九四三)
- 井本英一「古代イランの犬」(『オリエント』第二二卷三・四号、一九七一)

(付記)

犬に関する神話、伝説、習俗などの材料を集め、槃瓠伝説を調べはじめから、すっかり犬神憑きになったこの十年であった。本稿は、さきに発表した拙稿「槃瓠説話の考察」のいわば下篇にあたる。さて、これで首尾よく憑きものは落ちたかどうか。小稿を成すにあたっては、数多くの著作を参考にさせていただいたが、とりわけ、松本信広、岡本三郎、井本英一の三氏の卓論に負うところが大きい。ここに特記して感謝するしだいであ

* On the Ancient Concept of the Canine Guide to the World
of the Dead : Takeshi SUZUKI